ひろば

「核兵器のない世界をめざして」
――被団協代表委員・田中熙巳さん講演会

24年10月、ノーベル委員会はノーベル平和賞を日本原水爆被爆者団体協議会（被団協）に授与しました。ヨルゲン・バトネ・フリードネス委員長は、「核のない世界」を実現するためのたゆまぬ努力と、核戦争がもたらす人道上の破滅的な結果の証言を発信しつづけてきた献身的な努力をたたえての授与と述べました。オスロで田中さんが受賞演説されました。

私たちの法律事務所は06年に「９条の会」を設立し、市内の９条の会等と協力して集会等を行なってきたこともあり、受賞を祝う会を、各９条の会、被爆者連絡センター、反核医師の会、非核の政府を求める会、護憲ネットワーク等々多くの団体や個人に呼びかけ実行委員会を立ち上げました。

03年４月に北海道で原爆症認定訴訟を提起して以来、田中さんに協力していただいた間柄であった弁護団長の高崎暢弁護士が、ご相談したところ「私が行きますよ」と93歳の田中さんが快く引き受けてくださったのです。

5月24日、祝う会は530人の会場が満席で330人の方が入場できませんでした。田中さんもこんなに多くの方は久々と喜んでおられました。

オープニングは、北海道合唱団の「ヒロシマのある国で」等、心に響く歌声。田中さんは講演で「13歳の時長崎で被爆。自宅の２階で本を読んでいたところ、突然あたりが光り庭に飛び出した瞬間、爆風で家がつぶれ、吹き飛んだガラス戸が割れずに背中にのしかかったので奇跡的に助かりました。救護所の小学校には100人近く横たわって、お母さんと声をあげて苦しんでいた人も次々と息を引き取りました。伯母危篤の知らせで、爆心地近くの伯母の家に向かう途中、一面真っ黒こげで、子どもが壁にへばりつき崖に張り付いたまま焼けている、川に何十人の遺体が浮かんでいる。あまりの惨状に心が閉じ、何も感じなくなりました。伯母の遺体を荼毘に付し骨を拾った時大号泣しました。9月に登校した時同級生の『私はひとりです。家族はみんな死んでしまいました』の声は今でも忘れられません。」「平和と核は両立しない。運動の目的は世界に１万2000発も存在する核兵器をなくすこと。生き残った被爆者は叫び続けてきました。」「被爆者は10年たてば、被爆体験を話せる人は１人か２人しか残らないのではないか。それを若い世代にどうつなげていくか。記憶の継承だけではなく核兵器をなくすということが今の課題です」と強調されました。

次に、札幌南高校定時制生徒（顧問野口隆教諭）が、朗読劇で、被爆者の手記から原爆の惨状や被爆者の苦しみを上演。また、98年から平和団体の募集に応じた高校生が「平和大使」として「私たちは微力だけど無力ではない」を合言葉に国連本部に270万筆の署名を届けましたが、札幌藤女子高校生は今年３月から札幌市等７か所600人の「被爆ピアノコンサート」を成功させ、核のない世界のために活動を続けますと力強く報告。

田中さんは、高校生の朗読劇や活動に「今、私たちにとって一番大事な課題は若い人にどう活動をつなげていくかです。だから、今日の高校生の頑張っている姿を見て本当に励まされました」と言われました。

原爆投下後から米国は放射線障害の怖さを伝える国内外の報道を禁止し、日本政府は救護所を閉鎖するという「空白の10年」がありました。54年３月の米国のビキニ環礁での水爆実験で第五福竜丸等漁船の被爆事件から、被爆者が自らの体験を語り始め、56年８月に被団協が結成され反核運動が高まりました。フリードネス委員長は、7月に来日、広島にも訪問し「核のタブーは壊れやすく、現在新たな不安的な核の時代に突入する瀬戸際にある。戦争が実際に起きている中で核兵器使用の脅しをされている状況に直面しているからこそ、被爆者のメッセージの中核の真実に立ち戻り、軍縮を記憶の中にしっかりと刻む、そして学習こそ過去の過ちを繰り返さない力になる」。若者に「あなた方がこの記憶の未来における管理人」「歴史を学び、忘却を拒否し、声を上げよう。なぜなら、私たちの生存はそれにかかっているから」と力を込めて呼びかけました。

被爆者を先頭に市民運動・国際社会の粘り強いうねりが核兵器禁止条約（TPNW）に結実させた運動を前進させ、唯一の戦争被爆国である日本政府に署名・批准させること、核兵器も戦争もない人間社会をつくりあげるために具体的に行動することこそ、ノーベル平和賞が、被団協に、そして唯一の被爆国の国民として、今と未来を生きる私たちに託した希望であり意思であると確信します。

（弁護士　高崎裕子）

●針生誠吉基金●
本誌は、故針生誠吉先生からの多額のご寄付によって、発行を支援していただいております。